



東北大学



川内北キャンパスの桜



川内北キャンパス

曙光



しよこう



キャンパス風景



2020年 秋号
東北大学全学教育広報

No. 50

目 次

■巻頭言

○新型コロナとオンライン授業

データ駆動科学・AI教育研究センター長 教授 早川 美徳 … 3

■全学教育各論

○コロナ禍におけるオンライン教育と成績評価

歯学研究科 教授 笹野 泰之 … 6

○コロナ禍における全学教育・自然科学総合実験

高度教養教育・学生支援機構 教授 関根 勉 … 9

■学問論

○「国際文化」がとり結ぶ奇縁

国際文化研究科 教授 黒田 卓 … 11

○教養教育について考える

東北大学名誉教授

工学研究科・工学部 工学教育院 学術研究員 佐藤 正明 … 15

■特別寄稿

○留学は新しい可能性を広げる教養教育

(株)インターサポート 代表取締役 浦沢 みよこ … 17

■新入生から

○入学への意気込みと全学教育授業を受けてみての感想

教育学部1年次 乙山 美優 … 20

■「曙光」(しょうこう)の由来について …… 23

巻頭言

新型コロナとオンライン授業

データ駆動科学・AI教育研究センター長 教授 早川 美 徳



かれこれ20年近くも前になってしまいましたが、米国のある大学に客員研究者として半年くらい滞在したことがありました。学期がはじまり、オフィスアワーになると教授のオフィスが並んでいる一角の廊下は学生達で溢れ、えらい賑わいぶりでした。この学生は随分と熱心なんだね、と、私のホストだった教授に言くと、そこの学生の学力の低さとか指導の大変さについて色々と愚痴をもらし、最後に『学生の居ない大学があれば、理想なんだけれどなぁ』と冗談を言ったのを覚えています。

そして、この度の新型コロナ禍。キャンパスからは学生の姿は消え、その教授が言った『理想』が突然に現実のものとなってしまいました。

仕事上、どうしても大学に来ざるを得ない用事も多く、主役の居ないがらんとしたキャンパスを歩いていると、2011年の東日本大震災の直後、授業再開までの期間が思い出されます。ただ、あの時は、あちらこちらに地震の傷跡が生々しく残っていましたが、現在のキャンパスはどこに目を向けても健全そのもので、たまにすれ違う人も、マスクを付けている以外は特に変わったところもなく、不思議な感覚に陥ります。

こうした中で、一部の科目を除いて、全学教育は全てオンラインでの授業が始まりました。インターネットやデジタルデバイスが普及・浸透している現在、こうしたテクノロジーを活用して授業を継続するのは自然で合理的な判断だと思いますし、技術的に特に高いハードルがあるわけでもありません。が、いざ実際にそれを始めようとする解決すべき課題も多く、システムのトラブルで皆様には多々ご迷惑もおかけしました。この場をお借りして、この間のご理解とご協力に感謝申し上げます。

これを書いている現在（6月初旬）では、私どものセンターにひっきりなしにかかってきていた問い合わせの電話やメールも随分と減り、学生も教員も、オンライン授業にだいぶ慣れてこられたのではないかと想像しています（授業開始の前後は、毎分1～2通のメールが飛び交う日がしばらく続き、この状態がこの先も続いたらどうなるのだろう、と、暗澹たる気分になったこともありました）。

パソコンを前に、ひとり自宅で勉強に取り組んでいる学生諸君の様子を想像しているうち、以前に読んだ本に、Sugata Mitra氏がインドで行なった Hole in the Wall プロジェクトが、やや批判的に紹介されていたのをふと思い出しました[1]。そのプロジェクトでは、インドの貧しい村の共用スペースの壁の中に、インターネットに接続されたPCを設置し、その地域の子どもたちが自由に操作できるように「放置」しておいたのだそうです。すると、子どもたちはPCに触れるうちに自分で使い方を覚え、調べものなどの「学び」が主体的に発動されるようになる等の効果が認められた、というのがそのプロジェクトの主張でした。しかしながら、よく調べてみると、プロジェクトのメンバーが頻繁に出向いて介入を行った場所では確かにそのような例もあったものの、誰も介入せず文字通り放置に近かった場所では、子どもたちに目立った変化は認められず、むしろ壊れたPCが放置された無残な状況であったとのこと。つまり、当然と言えばそうかもしれませんが、機械的な仕掛けによって「学び」が自発的に発動されると期待するのは、少なからず楽観的すぎる、というわけです。

もちろん、これは若年者の場合であって、大学生ともなれば、インターネットから得られる膨大な情報から、それぞれの興味や関心に応じて必要なコンテンツにアクセスし、学びを深めることができるのかもしれませんが(そのように期待されているはずです)。けれども、ネットを使った学びについては、用心すべき点もいくつかあります。

まず、情報の質や正確さはまさに玉石混交で、自分の専門に近い解説記事などを読んでいると、しばしば、作者は本当にこれを分かって書いているのだろうか、と、疑問に思うことも少なくありません。もちろん、沢山の人間が意見を交わしたり批判し合う過程で、間違いは次第に正され、集合知が形成されるというプラスの側面も期待できるでしょう[2]。そのため、性急に答えを求めず、少し斜に構えながら、時間をかけて内容を吟味する姿勢が必要かもしれません。

加えて、気をつけなければならないのは、個人が実質的にアクセス可能なサイバー空間の「狭さ」です。ネットを利用していると、過去の購入履歴などに基づいて、様々な広告や関連商品が現れますし、動画サイトを視聴していると、その人の嗜好に沿ったコンテンツに自動的に調整されていきます。検索サイトでは、それまでの履歴に応じてキーワードが示唆されたりもしますし、検索結果もアカウント毎に調整されています。これらはとても便利で有用に思える一方で、我々は無自覚なまま、それぞれが透明な泡のような隔壁の中に閉じこもったような状態にあるのではないかと、「フィルターバブル」の著者は警鐘を鳴らしています[3]。無数にチャンネルのあるテレビで、自由にチャンネルを選んでいるようなつもりでいて、その実、リモコン設定は誰かに操作されているような状態、とも言えるでしょう。さらに、ビッグデータやAIを駆使し、それぞれのバブルにある意図をもって働きかけることさえ可能になっているようです[4]。

残念ながら、オンラインでの授業はもうしばらくは続けなければならない状況のようで

す。オンラインでの学習に取り組む中で、どのような情報にどのようにアクセスするか、大学生としての基本的な態度や作法を身につけること、そして、学生の皆さん自身も気づいていないかもしれない「バブル」に穴を穿いて見える世界を拡大することが、皆さんにとっての重要な課題ではないかと思います。そして、大学の教員は、その点でも皆さんの指南役です。科目の内容に限らず、その道のプロである大学教員に質問したり助言を求めることができるのは、たとえネット越しであっても、他では得難い大学生の特権と言えるでしょう。

あまりパソコンばかり触っていると、体にも良くありませんし、ストレスの要因にもなりますので、電源を切って、体を動かしたり本を読んだりして過ごす時間も大切です。最後に、最近読んだ本で面白かった一冊を紹介して、筆を置くことにします（文献[5]）。まだウィルスやDNA, RNAが見つかっていなかった時代からヒトゲノム解析まで、研究者の奮闘ぶりが面白く綴られており、新型コロナの背景的な知識を得る意味でもお薦めいたします。

（はやかわ よしのり）

文献

- [1] Geek Heresy: Rescuing Social Change from the Cult of Technology, Kentaro Toyama (PublicAffairs, 2015).
- [2] 「みんなの意見」は案外正しい, ジェームス・スロウィッキー (小高尚子訳) (角川文庫, 2009).
- [3] フィルターバブル, イーライ・パリサー (井口耕二訳) (早川書房, 2016).
- [4] AI vs. 民主主義, 高度化する世論操作の深層, NHK取材班 (NHK出版新書, 2020).
- [5] 生命科学者たちのむこうみずな日常と華麗なる研究, 中野徹 (河出文庫, 2019).

全学教育各論

本年初頭から、新型コロナウイルスによる感染症 (COVID-19) が日本も含めて世界各地に広がり、本学においても、被害拡大を防ぎ、公共の安全を確保することが喫緊の課題となる中、様々な活動が禁止・制限されました。授業については、4月の準備期間を経て、5月からオンライン授業が開始されました。

そこで、お二人の先生から、全学教育科目のオンライン授業の実施等について寄稿していただきました。



コロナ禍におけるオンライン教育と成績評価

歯学研究科 教授 笹野 泰之

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染拡大に伴い、令和2年度の東北大学の教育はオンライン授業を中心に進められている。全学教育においても4月20日 (月) からの試行期間を経て、5月7日 (木) にオンライン授業が本格的にスタートした。慣れないオンライン授業に戸惑いながら講義を担当してきた教員の1人として、また、学務審議会で授業評価と成績評価の検討を担う委員会 (教育情報・評価改善委員会) の責任者として、オンライン教育の現状と今後の課題について纏めてみたい。

(1) オンライン授業に関するアンケート

本学では、学務審議会教務委員会と高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター (CIR) が中心となり、学生および教員を対象にオンライン授業に関するアンケートを実施した。アンケート結果の詳細は、東

北大学第6回教育調査研究会において既に報告されているので、本稿では筆者が注目した結果を資料¹⁾から引用し、個人的な意見で恐縮だが加えて記載させていただく。

アンケートの実施期間は2020年6月11日～25日であり、学生を対象としたアンケートでは、学部学生の回答率は27.7%であったという。全学年に渡るアンケートであることから、全学教育および専門教育の両方を含む、東北大学の授業全体に対する評価となっている。

リアルタイム型授業に比べて、事前に録画した講義を配信するオンデマンド型の授業を受講する学生が多く、学部学生全体としてはオンライン授業を肯定的に評価していた。通学の時間を要さず、自分のスケジュールに合わせて受講できる等の利点を感じているようだ。

ただ、1年生は他の学年と比べると、全般

的にオンライン授業の評価が若干低くなっていた。PCや情報機器の操作は、特に低学年ほど苦手意識があるようで、学修の充実感についても1年生は低かった。今年度の1年生は大学に入学して以来、大学生らしい学生生活を経験していない。期待した大学の授業とは異なるオンライン授業に物足りなさを感じているのかもしれない。この結果から、オンライン授業の導入は、学生が大学生活にある程度順応してからが好ましく、また、事前にPCや情報機器の操作を修得する授業（現行の情報科目「情報基礎」等）を必修として履修させる対応も必要と思われる。特に、今の若い世代には少ないとは言え、ITリテラシーの低い学生がある割合で在籍することから、全学生を対象に、オンライン授業を受けるスキルを確実に身につけさせるカリキュラムが求められる。

また、学生から「課題が過剰」との声が寄せられていた。おそらく、学生の顔が見えないオンライン授業では、教員は出席や理解度の確認のため、対面授業以上に課題を課す傾向があるようだ。ある学部では、1年生の約30%が体調不良を訴えているという。過剰な課題に疲れているようだ。対面授業では、例えば雑談の中で学生から「他の授業の課題と重なって大変です」等、指摘され、教員が対応を変える機会もあるが、オンラインでは学生の意見は聞き難い。チャットやメール等、学生からのフィードバックの手段はあるが、学生は雑談よりもハードルを高く感じるのだろう。対面授業における学生と教員との雑談のもつ意味は大きいと思う。

学生からの不安・不満で特に目立ったのが「成績評価方法の不明瞭さ」である。同様な不安・不満は教員からも寄せられている。本学の多くの教員が試験の実施方法や成績評価の方法等に不安・不満を感じていると

回答している。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）という想定外の事態でオンライン授業が急速に導入されたことから、成績評価の体制作りは追いついていないのが現状で、今後の整備を急ぐ必要がある。その過程での試行錯誤は避けられないが、学生の不利益と教員の負担を最小化するために、他大学の取り組みを参考にすることは有用と考える。

（2）オンライン授業の成績評価

既に述べたように、学生からも教員からも、オンライン授業の成績評価に関する不安・不満の意見が寄せられていた。筆者自身が全学教育および専門教育で担当する科目では、新たな知識の修得が重要な要素であり、成績評価に際して、知識を問う客観テストが欠かせない。その観点で、筆者が注目した他大学の取り組みを紹介したい。

① 持込を前提とした試験とする²⁾。

学生を3～4のグループに分け、グループごとに異なる問題を出题し、学生同士の相談をできるだけ防ぐ。この場合、学生同士の相談を完全に防ぐことができないことに加え、異なる試験問題を受けた学生を同じ基準で評価することになり、学生全員を公平に評価することが難しいと思われる。

② 物理的な筆記による試験を行う^{2, 3)}。

オンラインの試験問題をPDFで用意し、アクセス可能な時間を限定して提示する。事前に配布・印刷させた所定の答案用紙に、手書きで試験時間中に解答し、答案用紙をスキャンするか写真で撮影してオンラインで提出させる。さらに後日、照合用に答案用紙を郵送するよう指示する。従来の客観テストに近い形式であり、現実的な対応と思う。ただ

し、学生一人一人を監督することはできず、仮に持ち込みを前提にしても、学生同士の相談は完全には制御できない等の課題は残る。

③ アクティブラーニングと連動させた論文課題（レポート課題）を課す²⁾。

例えば、学生に定期試験問題を作成する課題を出すことで、主体的な学習を促す。教員が問題作成の条件等を示し、条件に合う試験問題と回答例を作成するレポート課題に取り組ませることで、学生に定期試験よりも深い理解を促しながら成績評価ができる。興味ある評価方法と思うが、修得した知識を問う客観テストとしての利用は難しい。

国立大学法人名古屋大学と国立大学法人岐阜大学が統合した東海国立大学機構は、コロナ禍以前から、全国の大学の中でも特に遠隔講義システム授業の開発に注力してきたとお聞きしていたので、取り組みを引用させていただいた。また、東京大学法学部・法学政治学研究科の共通する取り組みも合わせて参考にさせていただいた。

オンライン授業の成績を客観的に評価する方法は、開発途上にある。さらに、オンラインで試験を行う場合はアクセス等で、技術的なトラブルを訴える学生が出てくることを前提にしなければならない。事前に追試験日程を用意し、別日程での試験機会を確保する等、教員側の対応が重要となる。

外国のある大学では、オンラインでの試験で全学生の8割以上に不正行為があったと報

道されていた。オンラインでの成績評価は、世界の大学教員共通の悩みのようだ。コロナ禍をきっかけとして必要性が顕在化したオンライン授業での成績評価の整備は、コロナ禍後に繋がる東北大学教育の新たなマイルストーンになるだろう。

本稿の執筆に際し、ご助言・ご協力いただいた本学高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター（CIR）の先生方に感謝申し上げます。

（さきの やすゆき）

（参考資料）

1) 「全学オンライン授業アンケート」の結果と課題

東北大学 第6回教育調査研究会（2020年7月6日）資料

学務審議会教務委員会、高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター（CIR）

2) オンライン授業で試験と成績評価を行うための教授法（ティップス）

東海国立大学機構 アカデミックセントラル
インストラクショナルデザインチーム

<https://office.ilas.nagoya-u.ac.jp/wp-content/uploads/2020/06/tips2.pdf>

3) 法学部・法科大学院における成績評価方法について

東京大学法学部・法学政治学研究科の学生のためのオンライン授業情報共有サイト

<http://www.j.u-tokyo.ac.jp/priority/>



コロナ禍における全学教育・自然科学総合実験

高度教養教育・学生支援機構 教授 関根 勉

2020年はコロナウイルスによる影響が全世界に拡大し、人間の活動を一変させる事態となった。日本においてこれを現実的に震撼させた出来事は、大型客船（クルーズ船）の乗客・乗員の罹患と、急速に広がっていった感染の様子であろう。日本全土にもその影響が強く及んだことは周知の通りである。小中高を含む全ての教育機関の通常の体制も破綻させた。皆さんもよくご存知の通り、東北大学においてもその講義・授業体制はすべて遠隔授業を利用せざるを得ないことになった。大学執行部の苦渋の決断はいかばかりであったかと思う。全学教育においても、多数のクラスからなる基礎ゼミは従来のやり方を中止せざるを得ないことになったほか、多くの学生が受講する自然科学総合実験もオンライン化の授業形式への変更を余儀なくされた。その場における体験知によって育まれる実習や実験の授業においては、その役割のほとんどを失うことになったのである。たまたまこのタイミングで曙光の執筆に関わらせて頂いたので、まさに遠隔理科実験授業を行っている途中経過(7月初旬)をここに記録させて頂くこととした。

自然科学総合実験は理系および文科系のた

めの科目の二つがあるが、前者は理・工・農・薬・医・歯の初年次学生の必修科目、後者は文・法・教・経の初年次学生向けの選択科目となっている。これらは基礎ゼミとともに、東北大学の特徴的な全学教育科目の一つとして位置づけられ、長年にわたって実施されてきた。文系向け理科実験科目を提供している大学は数少ないが、本科目では社会における自然科学の位置づけを特に強く意識している。現代・未来社会を築く上で欠くことのできない自然科学の役割をあらためて見つめ直してもらい、自然にふれ、自然科学的な考え方を体験することによって、受講生の視野を広げることを狙っている。同時に、論証や論述のみの思考だけではなく、課題解決のための仮定の検証や反証という実験の役割を体験により学ぶことができる。一方、“実験の重要性”を意識することは理系科目においてはより強調されており、自然科学の探求法や学び方に焦点があてられ、「テキストの内容(予備知識)および実験で得た情報(体験)を整理してまとめる(報告)」までの一連のプロセス(図1)がセットになっている。理系学部等においてよく見られる従来の理科実験では、ディシプリンに基づく必要項目

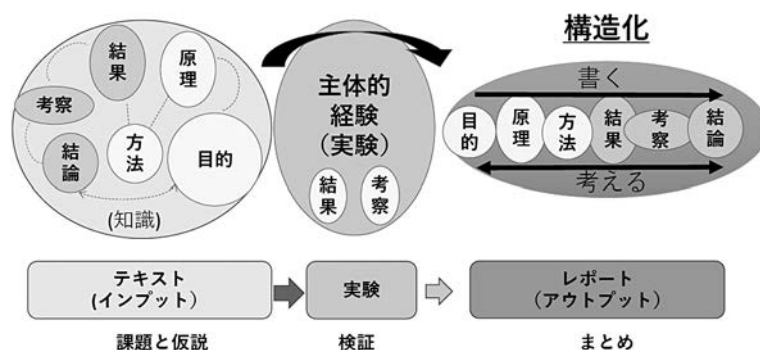


図1. 自然科学総合実験における学習プロセス (受講生向けの自然科学総合実験ガイダンス資料より)

やスキルを身につけることが主目的であるが、自然科学総合実験は物理・化学・生物・地学の融合型として設定されていることに加え、「意義づけ・原理・方法・結果・考察・結論」の1セットが一つ一つの実験テーマに設けられていることが特徴だ。研究活動を常に強く意識している大学教員にとってはその構造が理解しやすいのである。

さて、今回のコロナ禍によって、その肝である体験知を得る機会を奪われることになり、特にその役割が大きな文科系科目については、過渡的な措置として授業を延期せざるを得なかった。また理系科目については、図1のプロセス中の2番目の実験の役割を、動画や資料を用いて実験データや情報を提供することで代替し、次の段階のレポート執筆（整理・統合＋報告）を行ってもらおうこととした。具体的には、学務審議会実験科目委員会のもとに実験計画委員会と実施委員会のメンバー（理・生命・工・高教機構）が9つの教材の設計・制作を行い、5月連休明けの授業開始に向けて精力的に準備を進めた。実験テーマの中には、自分の身の周りにある簡単な道具を用いて、自宅において実験を行う工夫をしたものもある。一方、これらを統括するグーグルクラスの設定は自然科学教育開発室メンバー（高教機構）が進め、受講の仕方や情報を提供する「お知らせ」、実験動画・資料の「教材へのリンク」、実験テーマごとの「レポート提出」の場所、それぞれの「質問窓口」を設けた。また、レポートの採点は、ループバック機能を活用してレポートを構成する項目ごとに点数を表示したほか、重みを付けた総合点も設け、数多くの教員（約40名）と受講生（約800名）の個々のパイプを透明化して配置した。

現在、実施途中であり全体を総括することができないが、気づいた点を記したい。まず、前述の遠隔受講システムへの受講生の対応能力の高さである。レポートの構造等を表した簡易書式を配布し、執筆後、ウェブ上で提出する形式としたが、9割の受講生が最初から対応してきた。もちろん受講生の通信環境、使用するパソコンやソフト、クラスルームの使用法

などのテクニカルなやりとりも数多くあるが、必死に対応しようとしている姿がそこにある。また、時間経過とともに受講生の疲れも見えているようであり、支援が必要な受講生には教務課をとおして、従来通り、個々に連絡を取っていただいている。

特筆すべき点は、教員と受講生の双方向のやりとりが飛躍的に増加したことである。授業開始時期からの2ヶ月間において、クラスルームの質問窓口等の利用履歴の件数だけを数えても2,100件（延べ）になった。休日・昼夜を問わず、現在も刻々と増え続けているが、担当教員をはじめ、実験テーマ責任者や理科実験のスタッフがこの一つ一つにたいねいに対応している。受講生の実質的な利用割合は60%前後になり、半数以上の学生がすでに何らかのやりとりをしている。従来の理科実験の運営では、履修状況や実験レポートに関して教員側から声がけすることにより受講生を指導・支援する形態が主となっており、自らの“質問のすずめ”を受講生にいくら説いても“暖簾に何とやら”であった。もちろん今回は、通常の授業実施時における教員・TAと受講生の間の直接のやりとりができなかったというハンディがあるとはいうものの、授業時間にしばられることなく個々の受講生とのパイプが直結したために尋ねやすくなったのであろう。クラスごとに利用率が若干異なっていたり、周期的に質問数が増える様子などの特徴が現在でも見えているが、その質問内容等も含め、詳細については自然科学総合実験の学生アンケート報告書にゆだねたい。

さて、今回、教育・研究活動が厳しく制限された大学の状況下において、教職員も学生も自分の足下を見つめ、種々の意味においてその基盤を自ら確認しなおさなければならない機会となっている。まだまだ予断が許さない状況はしばらく続くと思われるが、この“しかたがない”状況下において、「失ったものは何か」、「(それにも増して) 得たものは何か」をまっすぐに見つめる必要がある。

(せきね つとむ)

学問論



「国際文化」がとり結ぶ奇縁

国際文化研究科 教授 黒田 卓

定年退職を目前に控えて、いささか旧懐に属する思い出話からこの一文を始めるのをお許しいただきたい。あれは、たしか今から30有余年も前の、1987年早春。まだ30歳になったばかりの私は、岡山県玉野市の宇野の波止場から瀬戸内海を渡って、四国は高松市に向かう連絡船に乗り込みました。高松にある香川大学教育学部に縁があって助手として赴任するためです。通称宇高連絡船の客室に腰を下ろすと、出航の合図に大音声の銅鑼が鳴り響きました。今でも鮮明に耳に残る、その銅鑼の残響には、故郷を後に海を渡る哀惜の念をかき立てると同時に、未知の街に住みつく不安と、大学で学ぶのではなく教えるというそれまでになかったステージに飛び出すんだという気負いと高ぶりを増幅させる響きがありました。

街の中心部にある大学キャンパスに行くと先輩の先生方から話を聞くと、助手の身分であったにもかかわらず、一か月足らずで始まる新学期からは、学部専門の歴史学授業とは別に、一般教育（と当時香川大学では呼ばれていました）では「国際文化論」という新設の授業を担当するように、と申しつけられました。この科目の内容や目的についてはほとんど説明も受けず、もっぱら折からの第2次ベビーブームに伴う臨時増募に即応する授業名称だと強調され、中味は

「あなたに任すから」とのことでした。今から思うと、教育学部の生き残り戦略として、教員免許を取得義務化しない、いわゆる「ゼロ免コース」を設置する布石だったのかもしれない。

学校教育法との関係で当時は助手の授業担当は一般的でなく、何か腑に落ちない気持ちではあったものの、しかしこの条件で採用されたからには、短い期間であったとはいえ新学期からの授業、とくに「国際文化論」の授業にきちんと準備しなければならない、と腹を決めざるを得ませんでした。大学院で西アジアやイスラーム圏の研究に取り組んでいて、それでこのポストに採ってもらったんだから、イスラームの歴史や文化こそが「国際文化論」の授業内容に相応しいと開き直り、そういえばイスラーム学の泰斗、井筒俊彦氏も、イスラーム文化を論じて「種々様々に異なる文化伝統の入り乱れ、錯綜し、からみ合う」なかで形成されてきた「国際的文化」だと喝破されていた（『イスラーム文化』岩波書店、1981年）ではないか、と萎える心を励ましつつ、文献をいろいろ調べながら講義ノートを作成してゆきました。今のように新任教員研修も何もない、自己流の授業でしたが、さいわい当時の四国では物珍しかったのか、教室は10歳余りしか歳が離れていない学生たちがいっぱい集まっ

てくれ、クーラーもない教室に熱気が文字通りに充満していたのを覚えています。

自転車操業で授業を何とかこなしながらも、はたして自分が実践している授業が「国際文化論」の名に恥じないものなのか、心の片隅にはいつも忸怩たる気持ちが燻っていた記憶があります。そのころの心境を文章にしたことがあったのではないかとふと思い出し、香川大学学術情報デポジトリを検索してみると、地中に埋めた「タイムカプセル」が出てきたかのように、当時教育学部教官が一般教育実施組織として属していた一般教育部発行の雑誌に、新人教師数名がご挨拶がてらエッセイを披歴している「談話室」という寄稿欄を発見しました。30数年前の私は、「言語と文化の交差点」と題する雑文のなかで、自分は西アジアの古代から始まって現代までの現地の諸言語をいくつも勉強するのに多くの時間を割いてきたが、歴史や文化そのものの研鑽には欠けるところがある、しかしたとえば、まだ停戦にいたっていなかったイラン・イラク戦争の最中、たんぱく質不足という状況下で、イスラーム食文化のなかで食することが忌避されてきた、世界三大珍味のひとつキャビアの親魚、チョウザメにウロコが発見されたため、食べられるようになったなどと、ペルシア語会話を習っていたM氏が話しており、その際に彼が「誰がウロコを発見したのか知っているかい？」と尋ね、私が「生物学者が最新式の顕微鏡で見つけたんでしょう」と答えると、ウィンクしながら「ホメイニー師だよ」と皮肉の笑いを浮かべながら答えてくれた、という逸話を紹介しています。つまり、言語習得というまっとうな勉学と、異文化に触れあう体験との交差するところに、「国際文化」なるものがほのかに垣間見えてくると言いたかったのだと思います（『香川大学一般

教育研究』第33巻（1988）, pp. 266-68）。他の英文学、中国文学、法学などの同僚の新任教官が誇らしげに自分の受けてきた学問分野の専門性や自分の研究の立ち位置を語っているのにひきかえ、専門の西アジア史学とは異なり「国際文化」学（論）に対しては、いかに自信がなく、間接話法でしか語れない心持ちでいたかが読み取れます。

悪戦苦闘の6年間を経て、大学設置基準の大綱化および大学院重点化という大学政策の大きな転換に伴い、全国どこでもそうでしたが、東北大学でも教養部を解体して、大学院に特化した、「国際文化」を冠する独立大学院の設置が準備され、その眼目の一つにイスラーム圏研究講座を新たに立ち上げるということが謳われました。この講座は大学院の専任講座なので、当時の職種で言えば助教授が適任という条件がつけられ、たまたま香川大学で助教授に昇任していた私に声がかけられたのでした。しかも決め手だったかどうかはともかく、「国際文化論」を数年にわたって担当してきた「実績」もありました。何か不思議な感に打たれました。次のステージへと飛び立つ機縁になったのが、あれだけ自信のなかった「国際文化」であったからです。

新しい講座で自分の専門に近い研究と教育ができる充実感がありました。やむをえないとはいえ基本的な専門文献や雑誌すら揃っていないハンディキャップはありましたが、なにしろ入学してくる学生たちが実にフロンティア精神にあふれ研究科を背負って立つ気魄に満ちていました。国際化や文化研究は当時いわばはやりのキーワードでしたが、しかしここでも依然として「国際文化」学（論）とは何ぞやというのは謎に満ちていました。一応理念としては「各地域文化の形成・発展・交流についての過去、現在、未来を現代における国際的一体化の視

点から総合的・学際的に考察する学問分野」と定義していますが、文化と国際にひっきりがなければ何でもよろしいと言っているに等しいと私は理解しました。事実、その「理念や研究方法の確立は今後の課題」だと自認しているほど、学問分野としての枠組みや方法が未定形でした（『東北大学大学院国際文化研究科：現状と課題』1995年）。英語名がInternational Cultural Studiesなので何か文化の差異を越えた斉一な国際文化があるのではという、やや荒唐無稽な議論、実はIntercultural Studiesの意味で文化間の摩擦・接触・交流を研究する分野ではないか、という説明、また近年では、人口に膾炙する「グローバル・スタディーズ」（「国際学」）に近いディシプリンだと位置づける所論もあります。しかしこの研究科の部局長も経験し、文科省や設置審に「国際文化」とは何ぞやと説明する機会が増えるにつれ、むしろこの未定形や無定形が真骨頂で、グローバルに生起する、私たちが未経験な諸問題に立ち向かうとき、既存枠組みにとらわれない課題別の共同研究可能性こそが要請されるんですよ、と禅問答のごとき返答をしてきました。多少比喩的に言えば、「アモルファスの強み」とでも言い換えられるでしょうか。

せっかく大学院のイスラーム圏研究専門講座に着任したのだからと思い、10数年間は自分が従前より取り組んできた、中東とりわけイランの近現代史や国際関係史の実証的な研究に没頭しておりましたが、大学法人化を前後して全学教育も受け持つことになり、それを通してドイツ文学や比較文学、英文学、日本文学などの先生方とも親しくなる機会も増えました。そうした全く異なる文学や文化を専攻する同僚の先生方と、「中東」が文学や歴史のテキストにどのように表象されているのかをめぐってささやかな研

究会を発足させました。今から15年も前のことで、そのとき以来この「中東」表象研究会は一度も途切れることなく、現在も2か月に一度ぐらいのペースで研究発表を中心に継続しています。ヨーロッパや日本の専門の先生方がヨーロッパ人や日本人がみた中東やインドの描かれ方、取り上げ方を専ら披露されるのに対し、私は逆にイランやインド在住のイラン系の人びとがどうヨーロッパや日本を表象・描出するのかをご紹介してきました。

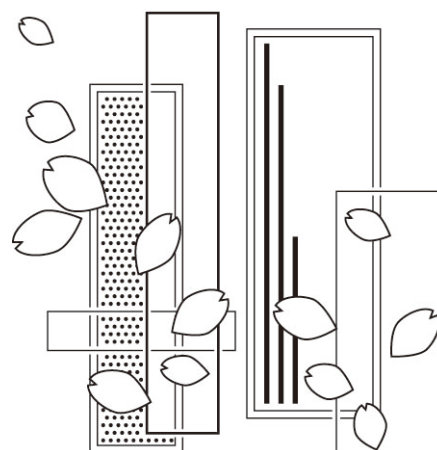
最近では、現在から120年もの昔、1903年末から翌年初め、日露戦争前夜の日本を訪問した、ガージャール朝イランの元首相アターバク・アアザム一行の動静とその随行員の一人が記した旅行記のテキスト分析に注力しています。このイラン人訪日団は、メッカ巡礼を名目に世界一周旅行を行うのが目的であったため、公式の使節団ではありませんでしたが、明治天皇に拝謁したり、伊藤博文や桂太郎といった政府要人と会見したりと、日本側はいわば国賓クラスの待遇で対応したため、官報はじめ数多くの公的記録や報道記事が残されています。この旅行記に、アターバク元首相が「Hoshi」新聞のインタビューを受けたという記載があったので、おそらくHoshiとペルシア文字で表記した新聞名は「報知新聞」ではと思い当たり、国立国会図書館で調べたところ、なんと英語を介したアターバクや随行者とのインタビュー記事がぼっちり出てきました（「報知新聞」明治36年12月17日付2面）。また、前日付の「東京朝日新聞」の紙面には、アターバクの大写真の肖像画入りで報道記事が掲載されていました（次頁図参照）。おまけに、この肖像画にはアターバクが自筆で「アリー・アスガル」という自分の名前とヒジュラ暦の年号（1321年＝西暦1903年）が書き込まれてい



イラン元首相 アターバケ・アアザム肖像

ます。お互いにおそらく未知の国であった、イランと日本が、お互いに近代と向かい合う苦闘のなかで、交差し合う。不思議な縁。あれだけ不可解だった「国際文化」がなんとなく、ああこういうもんなんだ、と思いついた瞬間。「国際文化」がとりもった奇妙な縁に導かれて歩んできた道を振り返りつつ、進むべき道を遥かに望みながら、こんなに自由に学問を堪能させていただいた大学という場に深甚なる感謝を捧げたいと思います。

(くろだ たかし)





教養教育について考える

東北大学名誉教授

工学研究科・工学部 工学教育院 学術研究員 佐藤 正明

現在本稿を執筆している時点で、世界中で新型コロナウイルスの蔓延による感染症が大きな問題となっている。国連は2015年に「持続可能な開発目標（SDGs; Sustainable Development Goals）」として17課題を設定した。その中の1つが「すべての人に健康と福祉を」であり、ターゲットの1つとして「2030年までに、エイズ、結核、マラリア…及びその他の感染症に対処する」が掲げられている。2015年の時点では未知のウイルスの猛威がここまでなるとは全く想定もされていなかったのではないだろうか。いずれにしても現在は気候変動の問題をはじめとして地球規模の課題が次々と出てきている状況にある。教養教育については、本「曙光」においても多くの先生が触れられている。教養教育の内容は社会との関係性を無視しては考えられない。変動の激しい社会情勢が生じている今改めて教養教育について高等教育における位置付けの視点から考察してみたいと思う。

まず、教養とはなんだろうか？手元にある広辞苑（岩波書店）には「1）教え育てること、2）学問・芸術などにより人間性・知性を磨き高めること」、精選版日本国語大辞典（小学館）には「1）教え育てること。教育。2）学問、知識などによって養われた品位。教育、勉学などによって蓄えられた能力、知識、文化に関する広い知識」と記載されている。特徴的には、単なる知識ではなく、キーワードとして人間性・品位などの用語が出てきている点にある。

教養教育を考える時よく話題にされるのが旧制高等学校（明治時代から昭和時代戦前まで存在した高等教育機関）である。旧制高等学校の特徴として井村は1）明確な教育目標、2）教養教育の徹底、3）外国語教育等を挙げてい

る [1]。また、旧制高等学校は教養教育だけをやることを謳っており、卒業後に大学に行く専門教育を受けることが前提になっていた。教育目標としては、語学、教養教育、専門基礎の3つであることが指摘されており、中でも語学が重要視されていた。事実、第二高等学校史によって文科と理科における1週間の授業時間を見てみると、語学教育に割いている時間数が全体の約1/3に当たり、大変に多いことがわかる [2]。また、長所として3年の教育期間がモラトリアムの時代であったことが挙げられる。すなわち、この期間にじっくりと腰を据えて考え、人生の目標、進むべき専門領域を自分で決めることができた。余談ながら、この教育システムはエリート育成として有名なフランスのグランド・ゼコール準備級とグランド・ゼコールとの関係に似ている [3]。

戦後は教育制度が大きく変わり、昭和22年には学校教育法により新たに国立新制大学が設置された。設立当時はどの大学も教養部を有し、一般教育と称して人文科学、社会科学、自然科学などの基礎科学を中心に教育していた。教養部において2年間で所定の単位を取得すると晴れて専門教育の課程に進学できる仕組みになっており、教養教育の位置付けはあくまでも専門課程のための基礎教育であり専門教育に対しては対立する概念の意味合いが強かった。旧制高等学校との大きな違いは、教育課程が2年間と短くなったことに加えて、最初の入学の時点から学部が決定されていたことにある。難関を突破して大学生になって大学教育に胸を踊らせていた新入生にとって専門教育への期待が先延ばしとなり、一般教育科目はあまり魅力的とは言えず、高校教育の延長であるとの悪評も多く聞かれた。このよう

な中で、平成3年には大学設置基準が大綱化され、教育課程の細かい基準がなくなり各大学の裁量に任されることになった。この時を境に多くの大学で教養部が廃止・解体され、例えば本学のように「全学教育」と称する教養教育が実施されるようになり今日に至っている。

ところで、現在の社会（ここでは主として企業）は、どのような具体的人材を期待しているのであろうか。日本経済団体連合会（以下、経団連）は、第5期科学技術基本計画（平成28年度～令和2年度）に基づき [4]、日本がこれから進むべき新たな社会「Society5.0」の実現を前提として、産業界が求める学生の資質・能力を企業へのアンケートの結果としてまとめている [5]。なお、経団連ではSociety5.0はSDGsへも貢献出来るとして、その考え方も併せて示している。学生に求める資質、能力、知識として、文系、理系いずれにおいても主体性、実行力が1、2位を占め、続いて課題設定・解決能力であった。このようなアンケート結果に基づき、経団連では大学教育において「最終的な専門分野が文系・理系であることを問わず、リテラシー（数理的推論・データ分析、論理的文章表現力、外国語コミュニケーション力など）、論理的思考と規範的判断力、課題発見・解決能力、未来社会の構想・設計力、高度専門職に必要な知識・能力が求められ、これらを身に付けるためには、基礎となるリベラルアーツ教育が重要である」としている [6]。

リベラルアーツとは中世西洋の大学において自由7科と呼ばれた科目群を指すが、ルネサンス期になるとリベラルアーツは専門教育に対する一般教養を意味するようになった[7]。前述の旧制高等学校の教育は正にリベラルアーツを手本として組み立てられた教育体制であり、最近この用語が再び使用され始めた背景には、教養教育としてのリベラルアーツがまた新たに見直され始めているのではないだろうか。

経団連では、リベラルアーツ教育として「人文学、社会科学、自然科学にわたる学問分野を学ぶことを通じて論理的思考力と規範的判断力を磨き、課題発見・解決や社会システム

構想・設計などのための基礎力を身につけること」と定義している [8]。その手段として、以下の3項目が挙げられている。

- 1) 一つの専門分野を深く学ぶことによって論理的思考力を身に付ける
- 2) 他分野への関心と学びによって幅広い知識と複眼的な思考力を得る
- 3) 規範論を研究する学問領域を学ぶことによって規範的判断力を磨く

これらの内容はリベラルアーツと称してはいるが、学士課程4年間の教育を前提としているように思われる。

以上、教養教育について年代を追ってその変遷を見てきた。著者としては、これからの教養教育においては旧制高等学校に見られる基礎科目と語学を重視した上で、SDGsの課題解決のためにも複眼的視点を養うことと人としての品位・人格形成の涵養を目指してほしい。いつの世も次代を担う若者に対する期待は大きい。

（さとう まさあき）

参考文献

1. 井村裕夫 「日本の高等教育の課題」 京都大学高等教育研究第12号 2006
2. 第二高等学校尚志同窓会編 「第二高等学校史」 1979
3. フランス教育学会編 「現代フランスの教育改革」 明石書店 2018
4. 閣議決定 「科学技術基本計画」 平成28年1月22日
5. 日本経済団体連合会 「今後の我が国の大学改革にあり方に関する提言」 2018年6月19日
6. 日本経済団体連合会 「採用と大学教育の未来に関する産学協議・報告書Society 5.0に向けた大学教育と採用に関する考え方」 2020年3月31日
7. 斎藤兆史 「教養の力 東大駒場で学ぶこと」 集英社新書 2013
8. 日本経済団体連合会 「採用と大学教育の未来に関する産学協議会 中間取りまとめと共同提言」 2019年4月22日

特別寄稿



留学は新しい可能性を広げる 教養教育

(株) インターサポート代表取締役 浦 沢 みよこ

株式会社インターサポートの浦沢と申します。この度は、大滝精一先生にこのような機会を頂き大変光栄に思っております。

私の父は、三神峯にある東北大学原子核理学研究施設（核理研）・現電子光理学センターに勤めていたので、休みにはよく職場に遊びに行きました。職員の皆さんやそのご家族との楽しい思い出が沢山あります。外国人の研究者の方との出会いも世界を身近なものにしてくれました。よく働き、よく遊ぶ！いつも一生懸命な核理研の皆さんを近くで見れたことが私のキャリア形成の原点だと思っています。

高校を卒業後、バスガイドや海外でのワーキングホリデー、その後英会話学校に勤めた後、留学を専門に扱う旅行会社インターサポートを1996年に設立し、今年で24年目になります。東北大学の皆様からは、交換留学等で海外へ行くビザや航空券のご依頼を頂くこともあります。

「教養」は世界の共通言語。そう実感したのは、40歳の時でした。もっと早く気付いていたら私の世界はもっと広がったのかも少し悔しい気持ちがあります。

私が初めて海外へ行ったのは、中学2年夏休みでした。アルプスの少女ハイジで見た、とろんととけるチーズに憧れ、小学6年生か

ら新聞配達をしたお金を貯めてようやく実現、高校生の時にはアメリカへ、この頃には、進学ではなく就職をして貯金をし、海外で働こうと考えていました。そこで就いた仕事はバスガイド。まったくやりたい仕事ではありませんでしたが、「自分の為にやらなくてはいけない仕事」でした。4年間務めてニュージーランドへ渡り、現地では語学学校に通った後に現地ガイドをしていました。その後、帰国した後も海外と係る仕事をと、英会話学校の留学部門に勤務したのですが、その会社が倒産。お客様に迷惑がかかりそうになったために、起業することとなりました。

そんな高卒で就職、起業した私が改めて「教養」というものに触れる契機となったのは、社長をしながら大学に入学することに決めた、起業して8年目の36歳の時。きっかけは知合いの経営コンサルタントの方に「宮城大学には社会人入学制度があるので受けてみたら？」と言われたことです。「社長が女子大生！」これは会社のいい宣伝になる。また、今まで積んできた経験がどのくらい評価されるものなのか、試してみよう。そのくらいの軽い気持ちでした。

そして始まった社長と大学生としての二重生活。社長業をしながら昼間は大学、夜と

週末は仕事の生活になりました。1年目の夏休みは思い切り仕事ができ今まで一番素晴らしい！と思ったものです。そして、前期の成績を初めて見た時に驚きとともに自分の中で無謀な計画が始動しました。

高校卒業まで成績が良かった思い出はありませんでしたが、目指せ全部「優」。履修科目を最小限にして必修と勉強したい教科や先生だけに厳選し、講義でわからないところは周りの学生に聞く、必要な時にはご馳走してでも。そうした甲斐もあって、狙い通り全部「優」をとることができただけでなく、3年生の時には、教授に勧められ、4年を飛び級して大学院へ行く試験にも合格できました。

そんな中、最後の最後に教養科目が1単位足りないことがわかり、その時に履修できたのは、それまで避けていた「音楽と人生」という科目のみ、しかし、この講義が私の「教養」に対しての理解を大きく広げてくれることになりました。

講義は、有名な作曲家と名曲が生まれた背景を勉強。それとヴァイオリンを大学のステージで1曲弾くという内容です。レポートで取り上げたのはモーツァルト。そのころの旅は相当に大変で命の危険があったそうですが、彼は36歳の短い生涯の10年間は様々な外国へ旅をつづけました。素晴らしい曲と名声を残すことが出来たのはこの海外での経験があったからだそうです。私の中での留学の意義が一層大きくなった瞬間でした。

また、私の演奏曲はキラキラ星。オーケストラ部の友人からヴァイオリンを借り、家のクローゼットで特訓、いい音が出た時は英語が通じた時と同じ感動があり、音楽家に対する畏敬の念を心から持つことができました。この経験は、後に仙台フィルハーモニー管弦

楽団の評議員に推薦いただいた際にも活かされました。

振り返ってみると、社会人大学生の私が「優」を取ることができたのは、経験を知識に変えることができたのです。なりと入ってきたのだと思います。経験は自分のオリジナルです。本を読むこともネットで見ることも知識を得ることができますが、それを自分の五感全部を使って実践し経験することで自分自身のオリジナルの「教養」としてリアリティが増すとも信じています。

こうして、大学で得た「教養」は私のかけがえのない宝物です。この4年間の学びがなければ、私はインターサポートをとくに潰していたと思います。

現在、新型コロナウイルスの為に世界中のドア（国境）が閉じられています。この中で海外留学を途中帰国した方や、断念した方も多くいます。弊社も3月以降、本業である留学手配が全くできない状況の中で何ができるかを模索してきました。

その中の一つとして、急速に進むテレワークやオンラインでのコミュニケーションの機会に触れ、オンラインによる留学体験の提供可能性を探っていました。当初は、オンラインで？とその可能性を信じていませんでしたが、自分でもオンラインでのセミナーに参加したり、社内外のオンライン会議に参加したりするうちに、オンラインでもリアルな面談に遜色のない人間関係も構築できることに確信を持つことができました。

今後は、リアルとオンラインを組み合わせた留学の可能性をどんどん探求していきたいと思います。

海外へ行く、留学するというのは、新しく生きなおす。新たな人生のページを拓いて

いくことだとも思っています。空気のように当たり前だと思っていたことが当たり前でないことに気づき、大袈裟に聞こえるかもしれませんが、初めてバスに乗るのさえ命がけ。行き方を色々な人に聞き失敗して途方に暮れていたら、乗っていた人が一緒に降りてくれて次のバスを探してくれた話など沢山聞きます。こうした小さな体験の積み重ねがコミュニケーション力をつけ新しい可能性を開いてくれるのです。

私自身も起業家になるという大きな目標があったわけではなく、小さな出会いや偶然が人生・キャリアを作っているのだと改めて思いました。

それにプラスして新しいことが学べる留学は新しい可能性を大きく広げてくれる教養教育そのものだと思っています。海外不安、英語ができない。そんなことで自分の世

界を狭めるのは本当にもったいない。あなたに合った場所、留学は必ずあります。

いま目標や夢がなくても目の前にある大切なことを積み上げることで、必ず自分の道が見える瞬間があります。その時に恐れず進む勇氣を持っていただきたいと考えています。

世界中のドアをこじ開けて新しい可能性を探しに行きましょう。

(うらさわ みよこ)

浦沢みよこ 経歴

株式会社インターサポート 代表取締役

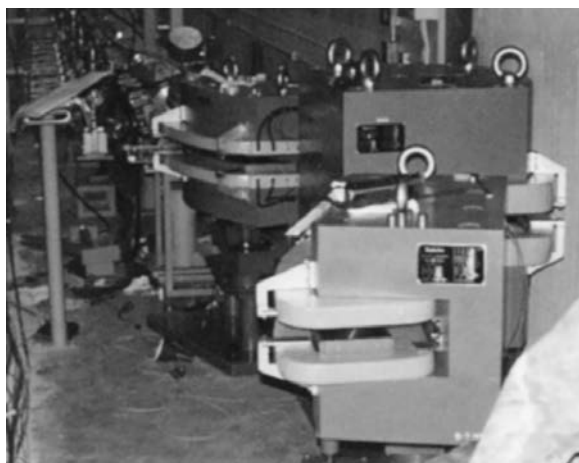
宮城大学事業構想学部 卒業

仙台市産業振興事業団 理事

仙台市フィルハーモニー管弦楽団 評議員

東北文化学園大学 特任教授・理事

宮城県中小企業同友会 青葉支部理事



核理研「ひとびとの記憶」より
エネルギー圧縮装置（1976年）



新入生から

いつもの春なら、本学に入学する新入生は、仙台市体育館での入学式に臨み、気持ちを新たに大学生活を開始するところでしたが、新型コロナウイルスによる感染症 (COVID-19) の感染拡大防止のための外出自粛期間があり、学生のみなさんは、大学を訪れることさえできない期間がありました。そのような中で、授業については、4月の準備期間を経て、5月からオンライン授業が開始されました。

そこで、学部新入生から、入学への意気込み、全学教育科目のオンライン授業の感想等について寄稿していただきました。



入学への意気込みと全学教育授業を受けてみての感想

教育学部1年次 乙山美優

[入学への意気込み]

私が大学に入学して頑張りたいのは、学業と私生活を両立させ、新しい事柄に恐れずに挑戦する事です。

まず、学業と私生活を両立させることについてですが、これは当然に見えて意外と難しいように思います。

私生活においては、学年を問わずいろいろな人と関わり自分の視野を広げたいと考えています。さらに、アルバイトにも挑戦して、社会で必要になる気遣いや技術を身に付けたいです。これらに挑戦するのは、時間に比較的余裕のある大学生の間でないとは難しいのではないかと思います。しかし、私生活にばかり夢中になっているわけにはいきません。

もう一つの要素の学業においては、与えら

れた課題をこなすだけでなく自分から興味のある事柄を調べていくように心がけたいと思います。入学し時間割を自分で決める時期は、自分が本当は何に興味があるのかを考え直す大切な機会になりました。自分が受講している講義、していない講義に関わらず興味のあるテーマについて自分で情報を得ようとする意欲を大切にしたいです。

学業に集中するのも、アルバイトやサークルなどで社会を体験するのもこれからの将来において必要な要素だと思います。そのため、どちらか一方に偏りすぎるのではなく、うまくどちらもこなすように時間の使い方を工夫したいです。

次に、新しい事柄に恐れずに挑戦することについてですが、この際には同時に何にどのような時期で挑戦するのか計画を立てる必

要があると思います。

私はかねてより留学に挑戦したいと考えていました。そのため入学した後に留学のための講座や経験者の話を聞いた時に、そのための計画を立てるのがいかに大切かを学びました。以前からの入念な準備と、何よりこの準備においては留学の目的や将来に経験がどう生きるか、つまり留学時だけではなく何よりその後について考えるべきなのだと思いました。

現在私は将来したいことが明確に定まっていません。そのため、多様な職種の人から話を聴ける機会に積極的に参加し、計画的に将来役立ちそうな資格を取得したいと考えています。そして何より、自分を見つめ直し自分の興味や将来について考えながら大学での学びの時間を計画を立てて過ごし、実りあるものにしたいと思います。

【オンライン上での講義を履修しての感想】

私はオンライン上での授業を初めて受けたのですが、いろんな意味で貴重な経験ができたと思っています。

数ヶ月間のオンライン授業の中では他の方々との交流が少なくなった上、自分がPCの操作に慣れていなかったために大変な思いをした時もありました。

私は三月の終わり頃に既に一人暮らしを始めていたため、対面して誰かと長時間話す機会が数ヶ月間ほとんどなく、慣れるまでは時折寂しく感じていました。さらに、他の方々と授業についての情報を共有するのも難しく、特に時間割を決める際には決めた時間割が本当に正しいのかどうか不安だった覚えがあります。しかし、サークルなどのオンライン新歓や学校の企画してくれた交流会により、寂しさは軽減されました。そし

て、同じ思いをしているのが自分だけではないとわかった時、オンライン授業に対して感じていた不安も少し和らいだような気がしました。

PCの操作に関してはわからない事柄が多かったのですが、初めの授業のあたりには授業というよりはPCの操作についていけませんでしたが、しかし、これに関しても情報基礎の授業から得た知識や、先生方の丁寧な説明と柔軟な対応によって操作に不安を感じるものが少なくなりました。操作に慣れるようになってからは逆に、余分な紙を使わず時間も短くすむPCでの文書の作成に便利さを感じています。

オンライン授業の中で大変だった点を上に記しましたが、逆にオンライン授業だったからよかった点もありました。それはいずれPCを本格的に使う機会が来たときのための練習ができた上、学部を問わない他学生との交流の機会が与えられた点です。

数ヶ月間の間オンライン中心の授業を受け続けましたが、これによってPCの操作にはだいぶ慣れました。もしもこのような機会がなければずっと操作に苦手意識を持っていたかもしれないと思うと、今回のような大変な事態も見方を変えれば良い経験になったのではないかと思います。

そして、オンラインだからこそできる授業形式もあります。これは1学年共通の基礎ゼミの授業で行われた「自分のこだわりを持つものの紹介」の際に感じました。この授業の中では、自分の好きなものやこだわりのあるものについて匿名で紹介し、興味のある紹介文にコメントをつけることができました。学部を超えた広がりのある交流が一度にできるのは対面の授業ではなかなか難しいのではないかと思います。

オンライン授業では初めは大変だなという思いが優っていましたが、慣れてくると便利だと思えるようになりました。そのため、これからまたオンラインでの課題提出や授業参加などがある際には迷わず対応したいと思います。

[全学教育授業を受けての感想]

全学授業の中で印象的に感じたのは、一つのテーマについて多様な視点から学べる点です。

私は以前より人の生と死について興味があり、自然と講義の内容も学部を超えてそれに近いものが集まっていました。そのため、生と死について講義を受けながら数ヶ月考える中で、このテーマが様々なアプローチの方法を持っていることに気づかされました。哲学的な視点から考える死のあり方、歴史的に考える生と死にまつわる文化、そして生命学的な視点から考える生命の大切さなど、死という一つのテーマでも学問が切り離されたものではなく、繋がりあったものであるのを実感しました。これに改めて気づけたのは、学部に関わらず自分の興味のある講義を選ぶことができる全学教育のおかげだと思

います。

さらに、これから調べたいテーマも全学教育のなかで発見できました。私は教育学部に入学したのですが、入学以前は教育について具体的に何を学びたいかは考えていませんでした。しかし、全学教育授業の中で教育に関わる講義をいくつか受ける中で、教育が人に与える影響の大きさについて学ぶとともに、教育の仕方の違いによる影響についてももっと調べたいと思うようになりました。これはまだ抽象的なテーマですが、これから授業を受け続けるにあたって、常に自分の興味を広げようと意識して真剣に授業に取り組もうと思います。

全学教育の中では学部に関わらず自分の興味のあるテーマについて学べます。それが新しい自分の興味のある分野の発見に繋がる上、分野を超えた学問の繋がりに学びの面白さを感じる時もあります。そのため、これからの全学教育の授業の中でも自分が今まで苦手、または興味がなかった分野でも敬遠しないで積極的に学んでいく姿勢を大切にしたいです。

(おとやま みゆう)

「曙光」(しよこう)の由来について

曙光とは、朝の太陽の光であることは、説明は不要であろう。

ドイツの哲学者フリードリッヒ・ニーチェは、キルケゴールと共に虚無主義者と呼ばれる。然し、私は彼等を虚無主義と呼ぶのは誤っていると考えている。原本を読まれれば直ちに判ることであるから此処には書かない。ニーチェであれば「ツアラツウストラはこう語った」あたりが分り易いと思う。

人間は妄執にとり巻かれている。今日の妄執の第一は偏差値であろう。諸君らの憎き偏差値は、君らの能力を示していない。例えば、岩波新書「天才」宮城音彌先生著を読みたい。他にも類書は数多くある。

君らの周辺に信ずべきものがあるのか。次から次へとニーチェは粉碎してしまう。もうやめてくれと云ってしまう程、何でも打ち壊す。考える輩はつよい。何でも突き破る。これがニーチェの著曙光である。然し、或る日、遂に壊れないものを見出す。そしてツアラツウストラ、つまり、君は、意気揚々と山を降りて里に向う。その君を照らすのが曙光である。若い君の力を輝かすように太陽はやさしい美しい光を君に注ぐのだ。

諸君、壊れるものをすべて壊し、本当に壊れないものを君の心の中に把め、それも、すぐ壊れてしまう。それが壊れたらすぐまた、本当に壊れないものを夢中になって把め、そして、本当に曙光を浴びる強い、あるいは、たをやかなる若人になれ。

(命名及び表紙題字) 元東北大学総長 西 澤 潤 一

令和2年9月30日発行

編 集 令和2年度 東北大学学務審議会広報編集委員会
 滝 澤 博 胤 学務審議会委員長
 山 口 昌 弘 学務審議会副委員長
 伊 藤 千 裕 学務審議会副委員長
 鈴 木 賢 一 経済学研究科教授
 芳 賀 洋 一 医工学研究科教授
 今 野 豊 彦 金属材料研究所教授
 菅 谷 奈津恵 高度教養教育・学生支援機構教授

発 行 東北大学学務審議会

問い合わせ先：東北大学教育・学生支援部教務課専門職員

〒980-8576 仙台市青葉区川内41

TEL 022-795-4982 FAX 022-795-7555

http://www2.he.tohoku.ac.jp/center/koho/koho_s.htm

(「曙光」バックナンバー)

曙光